

第 145 回 マイスターネット講演会

ジェイン・オースティンを知っていますか？

— その人と作品、「高慢と偏見」を中心に —

I. ジェイン・オースティン 略年譜

西暦	年齢	
1775	1	ハンプシャー州ステイーヴントンで誕生。父親はオックスフォード出の牧師。
12/16		5人の兄、姉1人、の次の7番目。弟が1人。(アダム・スミス「国富論」1776)
1778	3	ファニー・バーニーが「エヴェリーナ」出版。オースティンが影響を受けた作家。
1782	7	自宅で素人芝居。一家の演劇熱。
1783	8	姉と寄宿学校に入学し年内帰宅。1785年にまた別の寄宿学校に入学。
		(イギリス、パリ条約調印。アメリカの独立承認。13州失う。産業革命の進行。)
1787	12	この頃から習作を書き始め、15歳までに11作品ほど書く。
1794	19	更に作品を執筆。
1795	20	「分別と多感」の原型起稿。
1796	21	「高慢と偏見」の原型「第一印象」起稿。
1797	22	父親が、出版業者に手紙を書き、「第一印象」の出版を交渉するも断られる。
1798	23	「ノーサンガー・アビー」の原型起稿。
1801	26	父親が引退し、バースに転居。
1806	31	バースを去り、サウサンプトンに転居。
1809	34	ハンプシャー州チョートンに転居。旺盛な創作活動。
1810	35	「分別と多感」の出版が承認される。
1811	36	「分別と多感」匿名自費出版。初版完売。
1813	38	「高慢と偏見」を「分別と多感」の作者という名で出版。1500部完売、再販に。
1814	39	「マンスフィールドパーク」出版
1815	40	「エマ」出版。当時の皇太子(後のジョージ4世)がオースティンのファンだった。
1816	41	体調悪化。
1817	42	7月18日死去。41歳7ヶ月(副腎皮質機能不全のアディソン病と言われる。)
		死後「ノーサンガー・アビー」と「説得」出版。初めて作者名が明かされた。

英国： 17c. ドラマの時代 18c. ロマン派の詩 19c. 小説の時代

## Ⅱ。「高慢と偏見」 'Pride and Prejudice' の登場人物

### ベネット家

ベネット夫人

ベネット氏(ロングボーンの地主)

長女	2女	3女	4女	5女
ジェイン (22歳)	エリザベス(20歳)	メアリ	キティ	リディア

ビングリー(ダーシーの友人、  
ネザーフィールド屋敷を借りる)  
キャロライン(妹)

ダーシー (ダービシャー州の大地主。年収1万ポンド)  
ジョージアナ(妹)

キャサリン ド バーグ(ダーシー氏の叔母、大地主)  
ミス ド バーグ(キャサリン ド バーグ)の一人娘)

コリンズ(ベネット氏の甥)                      シャーロット(エリザベスの友人、27歳、  
ベネット家の隣人の長女)  
ウィッカム(ダーシー家の執事の息子)

### Pride and Prejudice

#### Chapter I

It is a truth universally acknowledged, that a single man in possession of a good fortune, must be in want of a wife.

金持ちの独身男性は、花嫁募集中に違いない、と言うのは、万人が認める真理である。

However little known the feelings or views of such a man may be on his first entering a neighbourhood, this truth is so well fixed in the minds of the surrounding families, that he is considered as the rightful property of someone or other of their daughters.

この心理は、周囲の家族の考え方に、しっかり浸透しているので、金持ちの独身男性が近所に越してくると、彼の気持や考えはさておき、自分たちの娘に相応しいお婿さんだと思ってしまう。

'My dear Mr. Bennet,' said his lady to him one day, 'have you heard that Netherfield Park is let at last?'

「あなた、お聞きになりました？ネザーフィールド屋敷がついに借り手が決まったんですって」と、ある日ベネット夫人が夫に言った。

Mr. Bennet replied that he had not. いや、まだ聞いてないねと、ベネット氏は答えた。

‘But it is,’ returned she; ‘for Mrs. Long has just been here, and she told me all about it.’

「でも、そうなのよ」、とベネット夫人は返した。「ロング夫人がついさっきいらして全部お話くださったわ。」

Mr. Bennet made no answer. ベネット氏は何も応えなかった。

‘Do not want you to know who has taken it?’ cried his wife impatiently.

「借りたのが誰かお知りになりたくないのですか?」、と妻はいらいらして声を上げた。

‘You want to tell me, and I have no objection to hearing it’ This was invitation enough.

「おまえが話したいなら、聞くのは構わないよ。」呼び水はこれで十分だった。

‘Why, my dear, you must know, Mrs. Long says that Netherfield is taken by a young man of large fortune from the north of England; that he came down on Monday in a chaise and four to see the place, and was so much delighted with it that he agreed with Mr. Morris immediately; that he is to take possession before Michaelmas, and some of his servants are to be in the house by the end of next week.’

「勿論あなたも知っておくべきですわ。ロング夫人のおっしゃるには、ネザーフィールドを借りたのは、北イングランド出身の大金持ちの青年で、月曜日に四輪馬車に乗ってやってきて、お屋敷がすっかり気に入り、すぐにモリスさんと契約したそうよ。聖ミカエル祭までには正式に契約して、来週中にはもう使用人が来るそうよ。」

‘What is his name?’

‘Bingley.’

‘Is he married or single?’

‘Oh! single, my dear, to be sure! A single man of large fortune; four or five thousand a year. What a fine thing for our girls!’

「勿論、独身よ!あなた。お金持ちの独身男性で、年収は4,5千ポンドあるわね。うちの娘たちには、何て素晴らしいことかしら。」

‘How so? How can it affect them?’ 「どうしてそうなの?それが娘達とどんな関係があるのかね?」

‘My dear, Mr. Bennet,’ replied his wife, ‘how can you be so tiresome! You must know that I am thinking of his marrying one of them.’

「あなたったら、もう。何て厄介な人なの! ビングリーさんがうちの娘の誰かと結婚するかも知れないってことです。」

‘Is that his design in setting here?’ 「その青年はそれが目当てでここに越してくるのかね。」

‘Design! nonsense, how can you talk so! But it is very likely that he may fall in love with one of them, and therefore you must visit him as soon as he comes.’

「目当てだなんて! 変な言い方は止めて下さい。でもビングリーさんが、うちの娘の誰かと恋に落ちる可能性は大いにあります。だからあなた、ビングリーさんが越していらしたらすぐにご挨拶に伺っていただきたいの。」

‘I see no occasion for that. You and the girls may go, or you may send them by themselves, which perhaps will be still better, for as you are as handsome as any of them, Mr. Bingley might like you the best of the party.’

「その必要はないよ。おまえと娘達で行けばよい。あるいは娘達だけで行かせればよい。その方がいいだろう。おまえは娘達の誰よりもきれいだから、ビングリーさんがお前を好きになってしまうかも知れない。」

‘My dear, you flatter me. I certainly have had my share of beauty, but I do not pretend to be any thing extraordinary now. When a woman has five grown up daughters, she ought to give over thinking of her own beauty.’

「まあ、お上手だ事。確かに私はずっときれいでしたけど、もう今となってはもうだめよ。5人の娘の子持ちとなつては、自分の美貌なんて諦めなくては。」

‘In such cases, a woman has not often much beauty to think of.’

「まあそうなのは、女性も美貌なんて考えていられないもんな。」

‘But, my dear, you must indeed go and see Mr. Bingley when he comes into the neighbourhood.’

「でも、あなた。とにかくビングリーさんをご近所に越してらしたら、ご挨拶に行ってくださいね。」

‘It is more than I engage for, I assure you.’

‘But consider your daughters. Only think what an establishment it would be for one of them. Sir William and Lady Lucas are determined to go, merely on that account, for in general you know they visit no new comers. Indeed you must go, for it will be impossible for us to visit him if you do not.’

「ちょっとそれは約束できんな。」

「でも娘達のことを考えてやって下さいよ。彼女達の一人が、素晴らしい家庭を持つことになるかも知れないのですもの。ルーカス夫妻なんて、ただそのためだけに、ご挨拶に行くんですよ。いつもは越してきた人に挨拶なんて行かないもの。ともかくあなたに行つて頂かなければ。そうでないと私達が行くことは出来ませんもの。」

‘You are over scrupulous surely. I dare say Mr. Bingley will be very glad to see you; and I will send a few lines by you to assure him of my hearty consent to his marrying whichever he chuses of the girls; though I must throw in a good word for my little Lizzy.’

「それはなかなか慎重だな。ビングリーさんは喜んで会つて下さるだろう。一筆書いて持たせてあげよう。娘達のうち誰でも気に入った娘と結婚して頂いて結構ですと。ただ私としては、リジー(エリザベス)をちょっと推薦しておきたいがね。」

‘I desire you will do not such thing. Lizzy is not a bit better than the others; and I am sure she is not half so handsome as Jane, nor half so good humoured as Lydia. But you are always giving her the preference.’

「そんなこと、止めて頂きたいわ。リジーなんて他の娘達と比べて少しも良くありません。ジェインほど綺麗じゃないし、リディアの方がずっと気立ての良い子です。あなたはいつもリジーを最良にするのね。」

‘They have none of them to recommend them,’ replied he; ‘they are all silly and ignorant like other girls; but Lizzy has something more of quickness than her sisters.’

「他の4人には、これと言って取柄は無い。」とベネット氏は答え、「4人とも馬鹿で無学、他の普通の娘達と少しも変わらん。しかしリジーだけは頭の回転が他と違うからね。」と言った。

‘Mr. Bennet, how can you abuse your own children in such a way? You take delight in vexing me. You have no compassion on my poor nerves.’

「まあ、あなたったら、どうして自分の子供達のことをそんな悪く言えますね。私を困らせて喜んでいるのね。私のか弱い神経をいたわってやろうというお気持なんてさらさらないのでから。」

‘You mistake me, my dear. I have a high respect for your nerves. They are my old friends. I have heard you mention them with consideration these twenty years at least.’

「いや、それは誤解だよ。お前の繊細な神経にはいつも敬意を払っているよ。そいつとは長年付き合ってきたし、少なくともこの20年間ずっと聞かされてきたからね。」

‘Ah! you do not know what I suffer.’

「まあ！ 私の苦しみなんてあなたは全然分かっていないわ。」

‘But I hope you will get over it, and live to see many young men of four thousand a year come into the neighbourhood.’

「でもおまえがその苦しみを克服して、年収4千ポンドの多くの若者達が近所に越して来るのを長生きして見て貰いたいと思うよ。」

‘It will be no use to us, if twenty such should come since you will not visit them all.’

万一そんな人が何十人来ても、あなたが訪ねて下さなければ、私たちには無駄です。」

‘Depend upon it, my dear, that when there are twenty, I will visit them all.’

「大丈夫だ、おまえ。そんな大勢来た時には、一人残らず訪ねてやるさ。」

Mr. Bennet was so odd a mixture of quick parts, sarcastic humour, reserve, and caprice, that the experience of three and twenty years had been insufficient to make his wife understand his character. Her mind was less difficult to develop. She was a woman of mean understanding, little information, and uncertain temper. When she was discontented she fancied herself nervous. The business of her life was to get her daughters married; its solace was visiting and news.

ベネット氏は、頭の回転の速さ、皮肉っぽいユーモア、控えめと気まぐれの奇妙に入り混じった人物が、23年間の経験をもってしても、彼の妻に彼の性格を理解させるには不十分だった。

ベネット夫人は大変な人で、頭は良くないし、知識も乏しく、情緒も不安定。気に入らない事が在ると、神経が病んでいると思ひ込む。彼女の人生の務めは、娘達を結婚させることで、彼女の人生の慰めは、あちこち訪ね、世間話に興じることだった。

### Ⅲ. 様々な評価

#### 1. 夏目 漱石 (1867~1916) — 「文学論」で、以下のように述べる。

「Jane Austenは写実の泰斗なり。平凡に活躍せる文字を草して技神に入るの点に於いて 優に髭眉の大家を凌ぐ。余云う。Austen を賞翫する能はざるものは遂に写実の妙味を開始能はざるものなりと。例を挙げてこれを證せん。 以下「高慢と偏見」第1章の英文『…Austenの描く所は単に平凡なる夫婦の無意義なる会話にあらず。…この1説のうちに夫婦の性格の躍然として飛動せるは文字を解するもの否定する能はざる所なるべし。…』

#### 2. ヴァージニア ウルフ (1882~1941) — A Room of One's Own 「自分だけの部屋」

‘ a woman must have money and a room of her own if she is to write fiction ‘

とにかく、「高慢と偏見」を書いているところを見られても恥ずかしくないでしょう。それなのに、ジェイン・オースティンはドアの蝶番がきしむのが好都合だと考えました。誰かが部屋に入ってくる前に原稿を隠せるからです。…ジェイン・オースティンが原稿を訪問者の目からかくす必要がないと思ったのでしたら「高慢と偏見」はより優れた小説になったでしょうか？私は1,2ページ読んでみました。しかし彼女のそうした状況が作品を少しでも損なったという証拠を何一つ見出せませんでした。…1800年頃、憎悪も、恨みも、恐れも、抗議も、説教もこめずに、ものを書いていた一人の女性が現に存在した。それこそ、シェイクスピアがものを書く態度だ。…人がシェイクスピアとジェイン・オースティンを比較するのは、両者の精神があらゆる障害物を燃焼しきっているということなのです。…

#### 3. カレン・ジョイ・ファウラー — 「ジェイン・オースティンの読書会」 ‘The Jane Austen Book Club’ 私たちはそれぞれ、自分だけのオースティンをもっている。

バーナデッド(67歳男性)のオースティンは喜劇の天才だ。オースティンの登場人物や会話は今読んでも本当に可笑しくて、シェイクスピアのジョークとは大違いだ。シェイクスピアのほうは、シェイクスピアだから笑わなければいけない気がして笑うだけなのだけれど。

#### 4. マイケル・S-Y・チェ — 「ジェイン・オースティンに学ぶゲーム理論」

今から200年ほど前にジェイン・オースティンがその代表的な6つの長編に於いて、ゲーム理論のコアになる考え方を体系的に述べていたことを主張したいと思っている。オースティンは特別洞察力が深かったわけではないが、理論的に容赦の無い人だった。オースティンは、選択や選好といった基本的概念から理論構築を始めている。オースティンが「洞察力」と呼んだ戦略的思考は、ゲーム理論に於ける中心的概念である。

#### 5. マーク・トウエイン & D. H. ロレンス

「『高慢と偏見』を読むたびに、オースティンの墓を掘り返して、彼女の頸骨で頭蓋骨を叩いてやりたくなる」 — マーク・トウエイン —

「偏狭な俗物で悪い意味で英国的」 — D.H.ロレンス —

参考文献

JANE AUSTEN	PRIDE AND PREJUDICE	OXFORD UNIVERSITY PRESS
Virginia Woolf	A Room of One's Own	Penguin Modern Classics
中野 康司 訳	高慢と偏見 上・下	筑摩書房
廣野 由美子	NHK テキスト ジェイン・オースティン 高慢と偏見	NHK 出版
ヴァージニア・ウルフ	川本静子訳 自分だけの部屋	みすず書房
カレン j・ジョイ・ファウラー 著	矢倉尚子訳 ジェイン・オースティンの読書会	白水社
マイケル・S・Y・チェ	川越敏司 訳 ジェイン・オースティンに学ぶゲーム理論	NTT 出版

